

大学院特別講義のご案内

- ◆ 日時： 2022年5月17日 17:30-19:00
- ◆ 場所：記念会館多目的ホール
- ◆ 講師：東北大学大学院歯学研究科 顎口腔矯正学分野 教授
溝口 到 教授

◆ 演題:下顎前歯部叢生のrelapseの原因を考える

要旨:1990年にDent Clin North Amerに掲載されたコロンビア大学のBramante教授の総説では、歯科矯正学の分野での未解決の大きな問題として抜歯・非抜歯の診断と前歯部叢生治療後のrelapseの原因が挙げられております。本セミナーでは、後者のrelapseの原因に関して述べさせていただきます。

1) 動的治療の時期と保定の期間

Buschang and Jay (2003) は、12歳から40歳台前半までの下顎前歯部の II (Little's Irregularity Index) の年間変化量を分析し、40歳台前半までは叢生が加齢に伴い悪化すること、およびIIの年間増加量は12歳から20歳までの期間で大きく、第二大臼歯が萌出するマルチブラケット装置による矯正歯科治療の適齢期において顕著な叢生の悪化がみられることを示しています。早期治療あるいは成長期での矯正治療は、生体のもつ高い反応性・適応性によってrelapseを起こしにくいという考えもあります。しかし、この研究結果はむしろ逆である可能性を示しており、成長期における最終的な動的治療の時期や保定の期間について再考する必要があると考えます。

2) 下顎前歯部叢生のrelapseの原因

Harradineら (1998) は、無作為に両側第三大臼歯の抜歯・非抜歯を振り分け、保定終了時から5年間の前歯部配列の変化を比較検討し、II、歯列弓長径および犬歯間幅径のいずれにおいても第三大臼歯の状態による差はなかったと報告しております。この研究は、ランダム化比較試験が適用されており、根拠レベルの極めて高い研究とみなすことができます。現時点では、前歯部叢生の悪化や治療後のrelapseの防止のみを目的とした第三大臼歯の抜去を支持する根拠はありません。このことは生体計測学的研究 (Southard et al., 1991) や有限要素法を用いた研究 (Gomes de Oliveira, et al., 2006) によっても支持されています。

3) 下顎前歯部の保定の問題点

我々の診療科では、患者の協力度によらず前歯部の配列を長期的に維持することができるbonded lingual retainer (Zachrisson, 1986) を下顎歯列の保定に用いております。しかし、この保定方法では、(1) 脱離によってrelapseやう蝕を生じる、(2) 犬歯間幅径の維持が弱い、(3) 予想外の歯の移動を生じるという欠点があります。この3番目の欠点に関して、症例を通してみたいと思います。

問い合わせ先: (顎顔面口腔矯正学教室 山城・黒坂 内線2958)